

ハイデルベルク信仰問答より

問 43 私たちは、十字架上のキリストの犠牲の死から、さらにどのような益を得るのですか。

答え それは、キリストの力によって、古い私が主と共に十字架につけられ、殺され、葬られ（ローマ 6:6）、私たちの死すべきからだの悪い情欲が、もはや私たちを支配せず（ローマ 6:12）、私たちが主に対して自らを感謝の犠牲として捧げるためであります（ローマ 12:1）。

本問答書に度々出てくる「益」という言葉がここで再び登場します。十字架上のキリストの犠牲の死は、私たちに何らかの「益」をもたらすようなのです。改めて、「益」とはどのようなものでしょうか。これまでの学びを振り返りますと、少なくとも二つの箇所において「益」という言葉が出てきていました。

- ・ 神の創造と摂理を知ることによって、私たちは、どのような益を得るのでしょうか。（問28）
 - ・ キリストの聖なる受胎とその誕生から、あなたはどのような益を受けるのですか。（問36）
- 問28の解説の中で、私は以下のように説明させていただいております。

「しかし、信仰に生きるには必ず『益』が伴うということ、この信仰問答は教えています。確かに、信仰を持って何一つ良いことがないのであれば、信じる意味そのものに疑念が生じてきても仕方がないでしょう。『信じることによってあなたの人生は幸せになる』という約束は必ず必要なのです。キリスト教はもちろん、まことの幸せをもたらす教えです。」

この内容に照らして今日の箇所を読み直してみますと、「主イエスの十字架の死は私たちに幸せをもたらすものである」と理解することができるようになるでしょう。ここで少し突っ込んで考えてみましたが、主イエスにとって十字架の死は想像を絶する苦しみであったはずですが、それが主イエスにとって「不幸なこと」「不利益なこと」であった（誰かが幸せになるために誰かが不幸を被った）かということ、そうではないと思うのです。主イエスは父なる神様から託された救いの大使命を果たされたのですから、それを貫徹した満足をもって「完了した」（ヨハネ19:28, 30）と言われたのではないのでしょうか。これは、自分が負っている使命を理解していなければ決して口にすることのできないことばです。主イエスの死は基本的に「刑罰の身代わり」の意味を持ちますが、それは厭々ながら引き受けたものではなく、他の誰にも担うことのできない役割の遂行でした。主は壮絶な苦しみの中で、同時に多くの人々が幸せになることへの喜びに満たされてもいたと思われま

問43の答えの中では、私たちにもたらされた「益」（幸せ）の内容が二つにまとめ上げられています。

①古い私が主と共に十字架につけられ、殺され、葬られた

ここには、「救われる前の私」と「救われた後の私」が別人であることが明らかにされています。救われる前の私は「古い自分」であった。そして、救われた後の私は「新しい自分」になったのだと。「古い自分」の状態は②で明確化されますが、それは罪（情欲）によって支配されていた自分です。支配されているということは、身動き取れないほどに抑え込まれてしまっていて、もがいてもあがいても抜け出せない状態にあったということです。欲望に支配され、不自由の中にあつた。そのような「古い自分」が死んだ。これは目に見えない事柄ではありますが、主イエスの十字架に「古い自分」（昔の自分）が一緒につけられて殺され、殺されただけではなく墓の中に葬られてしまったということです。これは視覚的によくイメージしてみる必要があるでしょう。私たちの心の中に潜んでいた罪の根っこが根元から断ち切れ、焼いて捨てられたのです。それは、あらゆる種類の欲望（金銭欲、支配欲、名誉欲、汚れた性的願望など）の根、怒りや憎しみの根です。もはやそのようなものに縛られながら生きなくてよくなった。主イエスが解放してくださったのです。これらの願望は聖められ、神の原来の創造の目的の下に置き直されました。

②私たちの死すべきからだの悪い情欲が、もはや私たちを支配せず、私たちが主に対して自らを感謝の犠牲として捧げられるようになった

「悪い情欲」については①でふれましたので、ここでは後半部分の「自らを感謝の犠牲として捧げられるようになった」という点に注目しましょう。この「救われた後の私」が始めていく新しい生き方は、ローマ12:1の聖句に基づいて勧められています。

こういうわけで、きょうだいたち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を、神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたの理に合った礼拝です。古代においては、ユダヤ教だけでなく多くの宗教において、礼拝で動物のいけにえを捧げるという行為がなされてきました。これは、神に近づく手段として重要なものでした。しかし、キリスト者にとって「神に対するいけにえ」とはキリストであり、その犠牲はもうささげ尽くされてしまったので、私たちはもはや「神に近づく手段」としての犠牲を持つてはいません。その代わりに私たちがささげることのできるものとして「感謝」と「自分自身」が挙げられています。高い代価を支払って私たちが救ってくださった神に対する心からの感謝と、この方に全身全霊とをもってお仕えする私たちの献身です。

【感謝と喜びを】（小坂忠）

感謝と喜びを 今主の前に 今主の前に
 賛美のいけにえを 今主の前に ささげよ
 イエスが流された 血潮で 聖められ
 天に私の名が 記されている喜び